

『就実教育実践研究』第9巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2016年3月31日 発行

実習施設と保育士養成校の協働による保育実習 (保育所)の実践Ⅳ — エピソード記録の手引検証 —

**A Collaborative Practice between Training School for Nursery Teachers and
Nursery Institution4:
Verification of Episode Description in Practical Training for Trainee**

澤津 まり子・蔵 永 瞳・延原 八重子・佐藤 奈々絵
山根 和枝・光守 加奈子・片岡 鎮佳・森橋 有希

実習施設と保育士養成校の協働による保育実習 (保育所) の実践Ⅳ

— エピソード記録の手引検証 —

澤津まり子、蔵永瞳 (幼児教育学科)

延原八重子、佐藤奈々絵、(なかよし保育園)

山根和枝、光守加奈子 (弘西保育園)

片岡鎮佳 (あすなろ保育園)

森橋有希 (橘今保育園)

A Collaborative Practice between Training School for Nursery Teachers and Nursery Institution4: Verification of Episode Description in Practical Training for Trainee

Mariko SAWAZU, Hitomi KURANAGA (Department of Preschool Education)

Yaeko NOBUHARA, Nanae SATO (Nakayoshi Nursery School)

Kazue YAMANE, Kanako MITUMORI (Kosai Nursery School)

Shizuka KATAOKA (Asunaro Nursery School)

Yuki MORIHASHI (Tathibana Ima Nursery School)

抄 録

本学科では、保育所実習において、実習園と養成校とが協働して、子どもの理解及び保育士の援助の見方を深めるために、実習日誌にエピソード記録を導入している。これまでの検討によって、エピソード記録の充実のためには、実習指導者や学生が参考にできるような手引が必要であることが明らかとなっている。これを受けて、昨年は、エピソード記録の手引を試作した。今回は、その手引使用の効果を検証した。

学生を対象とした調査の結果、実習中に手引はよく利用されていたものの、使用方法に偏りがあることや、全体を理解した上での利用には至っていないことが明らかとなった。また、実習園ではエピソード記録の指導に戸惑いがみられ、手引利用が周知されたとは言い難い状況であった。以上のことから、学生も実習園も、手引を十分利用するという段階には至っていないと考えられる。今回、学生と実習指導者から改善策が多く提案されたことは有意義であった。今後はさらに、手引の改善を図るとともに、実習園への普及に努めていかなければならない。

キーワード：協働、実習日誌、エピソード記録の手引、検証

I 問題の所在・目的

実践力を備えた保育士養成のためには、実習園と保育士養成校（以下養成校と記す）の協働による保育所実習の実践が重要と考え、筆者等は様々な取り組みを試行錯誤してきた。2013年には、情報交換及び保育所実習日誌（岡山県保育士養成協議会保育実習委員会作成）¹の指導に関する検討会を立ち上げ²、2013年～2014年は、子どもの理解及び保育士の援助の見方を深めるために、実習園の意識調査³や鯨岡（2005）⁴のエピソード記述をモデルとした実習日誌のエピソード記録に取り組んだ^{5,6}。

エピソードについて先行研究を管見すると、保育現場において、日常の保育活動の中から、目に見えない子どもの心を理解する有効な手段として、エピソード記述を実施しているものが多くみられる。また、保育現場だけでなく、実習においてエピソード記録を導入した取り組みも近年増加している。例えば塚田（2014）は、実習後に行ったエピソード記述を分析し、葛藤体験等から学生と子どもとのありようを促えようとしている⁷。増山・勝浦（2014）は、実習後、エピソード記述の葛藤場面について、学生と教員の対話を通しての学びを促えようとしている⁸。また、宍戸、柴田等（2013）は、独自の記録様式を使用し、実習記録を子ども理解につなげていく指導の在り方を検討している⁹。宍戸、柴田等の同校による継続した研究として、石井・柴田（2014）は、実習中の記録指導にエピソード記録を活用し子ども理解を深めるためには、養成校・実習園・学生の3者がうまくかみあうことが必要であると指摘している¹⁰。

養成校・実習園・学生がうまくかみあった保育実習を目指して、これまで筆者らは、実習園と養成校による協働の在り方を模索・実践してきた（澤津他2014）⁵。その過程で、2014年には実習中のエピソード記録の充実のため、学生だけでなく実習指導者も参考のできるような手引の必要性が明確となり、エピソード記録の手引を試作した（澤津他2015）⁶。今年度は昨年度試作した手引について、使用の効果を検証することを目的とし、その結果を報告する。

II 方法

1. 学生

1) 事前指導

学生には、以下の通り事前指導を行った。

(1) 1年次

1日参加実習前の2015年1月、参加実習の前に「保育所実習の手引」及び「実習におけるエピソード記録の手引」（以下、手引と記す。詳細は資料1参照）を使用して、記録の取り方全般を説明した。2015年2月の1日参加実習において、エピソード記録を含む1日分の実習日誌を課した。

(2) 2年次

本実習前の6月、再度手引を用いてエピソード記録について解説し、1日参加実習

時の記録を学生自身が添削した。また、学生に保育所の子ども様子を映像で見せ、それをエピソード記録にとらせた。共通の映像をもとに取り上げるポイント及び背景・エピソード・考察の書き方を解説し、実践への準備とした。

2) 実習後の検証

実習後の10月、全員に質問紙調査を実施した。

調査に当たって、学生には、研究目的及び回答内容を本研究以外の用途には使用せず、個人名を除くデータのみを分析すること、評価に反映するなどの不利益にならないこと等を口頭で説明し、調査参加への同意を得た。調査で尋ねた内容は本稿の資料2に示した通りである。

2. 実習園

1) 実習園への説明

全実習園に対し、依頼文書に手引を同封した。実習Ⅱでエピソードを1回以上記録する旨を書面で説明し、指導・助言欄にはエピソード記録を踏まえたコメントを依頼した。

2) 協働園の実習指導者との事前協議

6月に参加者10名（内訳：協働園の実習指導者8名、本学教員2名）により、エピソード記録をとるための事前準備及び記録の指導方法について、協議した。

3) 協働園の実習指導者による検証

8月の振り返りの会において、参加者10名（内訳：協働園の実習指導者8名、本学教員2名）により、手引使用の効果について尋ねた。

Ⅲ 結果

エピソード記録を実施した回数は、全実習生102名中、1回が67名、2回が21名、3回が4名、6回が3名であった。

1. 学生

学生による手引の効果検証は、実習後の質問紙調査によって検討を行った。回答者は、本学科における全実習生102名中96名、94.1%であった。

1) 手引の使用頻度

(1) 実習前

事前学習の際、手引をどのくらい使用したか尋ねた結果、以下の通りであった。「2.少し使った」が35%で一番多く、「3.まあまあ使った」が33%、「1.全く使わなかった」21%と続き、「4.けっこう使った」は8%、「5.非常によく使った」3%という結果であった（図1）。授業で手引を配布・説明したが、約2割の学生がエピソード記録の学習に、手引を使用したという認識がないことが判明した。

(2) 実習中

実習中、手引をどのくらい使用したか尋ねた結果、以下の通りであった。「4.けっ

こう使った」が32%で一番多く、「3.まあまあ使った」が29%、「2.少し使った」が23%、「5.非常によく使った」10%、「1.全く使わなかった」は6%であった（図2）。実習中は7割以上の学生がある程度高い頻度で手引を使っていたことが判明した。

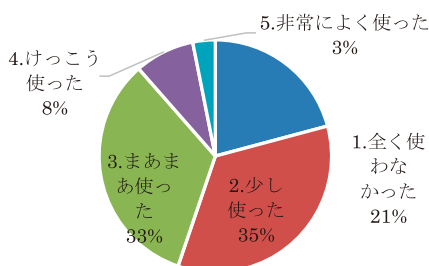


図1 実習前における手引の使用頻度

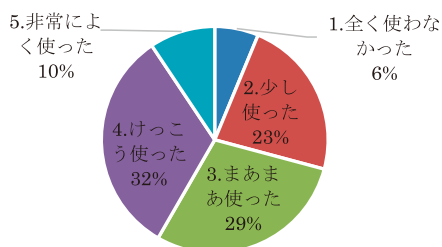


図2 実習中における手引の使用頻度

2) 実習中、手引を使用しなかった理由

実習中に手引を使った頻度として、「1.全く使わなかった」、「2.少し使った」と回答した28名に尋ねた結果、手引を使用しなかった理由は、以下の通りであった。「3.使いたい内容がなかった」29%、「5.手引の存在を忘れていた」26%、「2.使い方がわからなかった」21%であった。「使いたい内容がなかった」及び「使い方がわからなかった」については、事前学習及び内容の改善が必要である。

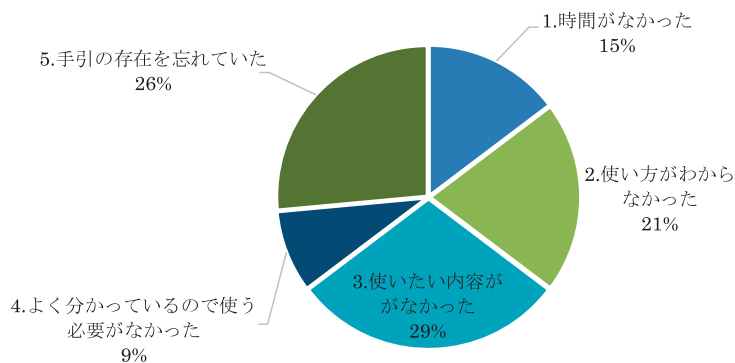


図3 実習中、手引を使用しなかった理由

3) 手引において使用頻度の高かった項目

実習中に手引を使った頻度として、「3.まあまあ使った」、「4.けっこう使った」、「5.非常によく使った」と回答した68名に、手引における6つの項目、すなわち、「1) エピソード記録の説明」、「2) 学生への指導方法 ①事前準備」、「3) 学生への指導方法 ②実習Ⅱ：子どもの姿の捉え方」、「4) 学生への指導方法 ③文章構成」、「5) 参考事例」、「6) 指導の観点」のうち、使用頻度の高かった項目を尋ねた結果は、以下の通りであった。「5) 参考事例」38%が一番多く、「4) 学生への指導方法 ③文章構成28%」、「3)

学生への指導方法 ②実習Ⅱ：子どもの姿の捉え方」17%が上位を占めた。実際にエピソードを記録する際には、「5) 参考事例」、「4) 学生への指導方法 ③文章構成」、3) 学生への指導方法 ②子どもの姿の捉え方」がよく使われていることがわかった。

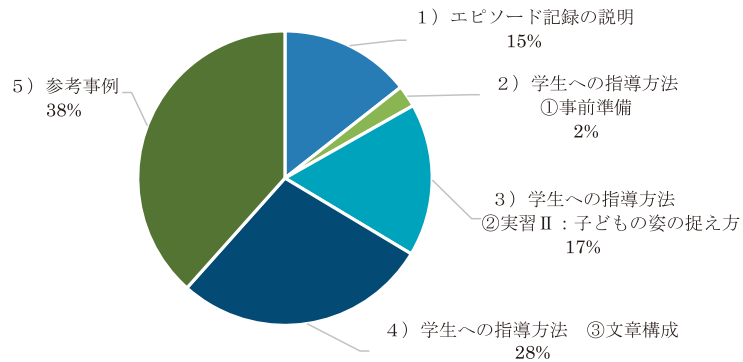


図4 手引において使用頻度の高かった項目

4) 手引の改善案

学生に改善してほしい部分について、「エピソード記録の説明」、「学生への指導方法」、「参考事例」、「指導の観点」の4項目に分けて尋ねた結果、様々な意見がみられた。以下に、各項目にいての意見上位3項目を示す。

(1) エピソード記録の説明 (回答者数31人)

- ・もう少し簡単な文書でわかりやすくしてほしい (9人)
- ・箇条書きにすると理解しやすい (2人)
- ・印象に残った出来事的具体例がほしかった (2人)

(2) 学生への指導方法 (回答者数37人)

- ・背景とエピソードの違いが分かりにくい (6人)
- ・矢印や表、イラスト、図で示してほしい (4人)
- ・事前準備で、テーマを立てる例もあるとわかりやすかった (4人)

(3) 参考事例 (回答者数51人)

- ・参考事例をもっと増やしてほしい (35人)
- ・背景とエピソードの具体的な違いを示してほしい (6人)

(4) 指導の観点 (回答者数20人)

- ・文章で詳しく書いてある方が分かりやすい (6人)
- ・観点到事例をつけるとさらに分かりやすい (3人)
- ・指導担当の先生がどう指導して良いか困っていた (3人)

5) エピソード記録を書いて、良かったところ・困ったところ

良かったところ・困ったところはどこか尋ねた結果、様々な意見がみられた。以下に各項目の上位3項目を示す。

(1) 良かったところ (回答者数92人)

- ・子どもを意識して見ることが出来たので、理解が深まった (33人)
- ・経験したことが一目で分かり、そのことについて自分の考えを見直したり、新たな発見へとつながったりする (20人)
- ・エピソード記録を書くことで、子どもの様子をしっかりと見ることができ、1日の反省や経験を思い返すことができた (9人)

(2) 困ったところ (回答者数92人)

- ・書き方がよくわからなかった (17人)
- ・背景とエピソードの内容がかぶってしまった (17人)
- ・日々心に残ることはあったが、日誌に時間がかかりすぎて、エピソード記録に時間をかけることができなかった (7人)

2. 協働園における実習指導者の検証

振り返りの会における協働園の実習指導者からの意見は、以下のように集約された。

1) エピソード記録の説明について

- ・特に意見は出なかった。

2) 学生への指導方法について

- ・実習Ⅱになると指導が多くなって、エピソードを書く時間がないことがある。実習計画を考慮して、実習Ⅰ・Ⅱを通してエピソード記録を書けるように柔軟に設定した方が良いかもしれない。指導がある日は書かない、実習Ⅱから書くというしりばがあると、エピソード記録を書ける日がなくなってしまうので、書く日についてはもっと柔軟に設定した方がよいのではないか。
- ・実習Ⅰで1回、実習Ⅱで1回としてはどうか。そうすると、自分の見方や文章の深まりを認識できるように思う。
- ・エピソード記録は書けば書くほど上達していくものなので、回数を増やしてはどうか。
- ・日誌を書いている中で、エピソードをみつけるのが負担になっている学生もいる。
- ・自分の考えが書き込まれておらず、観察記録のようだった。たった20日間で1・2歳児との関わりの中でエピソードを見いだすのは難しいのかもしれない。
- ・トラブルに目がいきがちだった。前日の子どもの様子を知らないのに、背景を書きにくいと学生が言っていた。

3) 参考事例について

- ・何をとりあげれば良いかわからず、だらだらとただ書いているだけの印象を受けた。自分でエピソードをみつけられないのかもしれない。参考事例より題材例がたくさんあれば、着眼点を見つけやすいかもしれない。

4) 指導の観点について

- ・学生は4つの観点を知っているのか。学生が実際に書いた文章を見ると、この観点を知らなかったように思う。
- ・自分の見方が誤っていないか、気にしながら書いているようだった。
- ・学生の見方と実習指導者の見方が違うこともあった。いろいろな見方があったので、学生が間違ったと思わないでほしい。
- ・実習指導者が文章を読んで分からないところを聞いていくうちに、学生の考えを知ることができたのはよかった。

5) その他

- ・メモをとらないので、言われたことを思い出せないのかもしれない。
- ・基本的な書く力はあらかじめつけておいた方が良くと思う。
- ・書き言葉がきちんとしていない。表現がつかない。赤ペンで直してもらったところは反映させるように指導をする必要があるかもしれない。

IV 考察

1. 学生の意見について

実習中における学生の手引の使用頻度を調査した結果、7割以上の学生が手引を使用しているが、約2割の学生は手引の存在を認識していないことが判明した。実習自体が精いっぱい状態で、エピソード記録に関心を向ける余裕がなかったのではないかと推測される。「使いたい内容がなかった」、「使い方がわからなかった」という学生もいたため、より丁寧な事前学習が必要と考えられる。

また、手引改善の意見を尋ねたところ、多くの要望が挙がった。

「1) エピソード記録の説明」では、簡単な文書でわかりやすくしてほしい、「2) 学生への指導方法」の意見に対しては、背景とエピソードの違いが分かりにくいとの意見に対して、できる限りわかりやすくかみ砕いて説明する等の改訂が必要であると思われる。

「3) 参考事例」では、もっと事例を増やしてほしいという意見が挙がった。これは学生の要望のなかで51人中35人と圧倒的に多い意見であった。手引には3歳未満から2歳児クラスを、3歳以上から4歳児クラスを取り上げ掲載しているが、できる限り要望に沿うならば、0歳児～5歳児の年齢別に掲載するという方策が考えられる。しかしながら、多くの事例を示すと、それに影響され学生が自分で主体的に考える力が育たないのではないかと懸念があるため、事例数を増やすことについては最小限に止める方がよいのではないかと考える。

「4) 指導の観点」に関しては、文章で詳しく書いてある方が分かりやすいとの意見があった。この項目は、実習指導者のために指導の際の観点を提示したものであり、実習指導者からはこのことについて改善を求められていない。そのため、この部分についての学生からの意見は参考意見として受け止め、現状の簡潔な表記を維持することとする。

「5) エピソード記録を書いて良かったところ」で挙げられている「子どもを意識して見ることが出来たので理解が深まった」に関しては、エピソード記録を取り入れた目的が反映されていることの表れと評価したい。一方で、「5) エピソード記録を書いて困ったところ」に関しては「書き方がよくわからなかった」、「背景とエピソードがかぶってしまった」等が挙げられた。学生の苦戦した状況を受け止めて、背景とエピソードの違い等、書き方全般について具体的な改善策の検討が必要である。

2. 協働園における実習指導者の意見について

「2) 学生への指導方法」では、手引に記載されていないエピソード記録を書く回数について、様々な提案があった。まず、現行では実習Ⅱで1回以上となっているが、回数を増やす、柔軟に設定する、実習Ⅰで1回、実習Ⅱで1回という提案がなされた。これに関しては、学生に過度の負担をかけないように考慮しながら、柔軟に対応できるよう改善策を考える必要がある。

また、子どもの姿の捉え方・文章構成について、学生はトラブルに目がいたりしがちで、特に背景を書くのが難しそうであったとの意見であった。子どもの姿の捉え方の題材例を多く示すことによって、着眼点が見つけやすいのではないかと提案は、「3) 参考事例」と、「2) 学生への指導方法」との関連において、参考事例を多くするより効果的であると思われる。

「4) 指導の観点」に関しては、実習指導者は、エピソード記録を通して学生の考えを知る機会となり、学生の見方との違いが明らかになることもあるが、いろいろな見方があってよいと肯定的に受け止めていた。また、4つの観点を意識することによって、よりの確かな指導に役立てようとする姿も認められた。一方、「③考察に誤りや誤解はないか」に関しては、実習指導者から、学生が自分の見方が誤っていないか、気にしながら書いているとの報告があった。また、学生の見方と実習指導者の見方が違うこともあるが、いろいろな見方があって良い、学生が間違ったと思わないでほしいという意見もあった。学生が僅か20日間の実習のなかで、それまでの状況を読み切れていない可能性は大きく、「③考察に誤りや誤解はないか」という項目を設けたことで、学生がそのことに慎重になり過ぎることもあったかもしれない。考察に定まった答えはなく、いろいろな見方や感じ方があって良いわけで、その時に感じた思いを萎縮せず書くことが、エピソード記録本来の目的に沿っているように思われる。これらのことを考慮すると、「③考察に誤りや誤解はないか」という項目は、削除した方が、学生の学びを妨げずに済むのかもしれない。次年度は、この項目を削除することを検討する必要があるだろう。その他として、メモをとらない、学生の書き言葉、表現力がつたない等、基本的な文章力不足を指摘された。本来実習以前の問題である文章力についても、この機を捉えて強化に取り組まなければならない。

3. 総合考察

本研究では、昨年度試作したエピソード記録の手引を実際に実習で使用してもらい、実習後に学生及び実習指導者の意見を尋ねることで、手引使用の効果を検証した。

学生は実習前より実習中に手引をよく使っていたが、エピソード記録を書く力量は個人差が著しかった。また、協働園からの文章力不足の指摘もあった。ただし、エピソード記録の目的は、型通りの書き方や見映えを良くすることではない。エピソード記録を導入した目的は、子どもの心の育ちに目を向け、保育者が働きかけた心の内を捉えようとする洞察力を養うことである。湯澤(2014)が、「エピソードを記述するという書く行為を通して、子どもの心の動きを捉えていくプロセスに、保育者と学生の区別はない。しかしながら、保育者という立場においては、子どもの遊びを中心とした保育を構成する人的環境としての役割を担うため、そこには自らの保育行為に関する省察が記述されざるを得ない。一方、学生は、その立場であるからこそ、子どもと水平な関係性の中で、まっすぐ子どもの姿を捉えることができると期待できる」¹¹とるように、学生と実習指導者が、自分たちが感じたエピソードと向き合うことによって、手引を手がかりとして率直に語り合うことが望まれる。

手引の効果について見てみると、ある程度の効果はあったと思われるが、多くの課題も判明した。今後は、より丁寧で詳細な指導によって手引の効果が上がると考えられる。年々、丁寧な指導を行うために時間を増やしているにもかかわらず、手引の内容が十分に理解されているとは言いがたいのが実態である。事前指導に費やす時間には限りがある。事後指導で現在実施しているエピソード記録を基にしたカンファレンスも含め、実習指導の在り方そのものを検討していくことが必要ではないかと考える。

エピソード記録の手引は、学生だけでなく、実習指導者からも、指導上の必要性が強調されて作成した。本研究の取り組みにおいて、協働園では手引を熟知し、指導に利用されている様子がうかがえた。しかしながら、実習園全体としては、エピソード記録の指導に戸惑いもみられ、まだ手引利用が周知されたとは言い難い。

本研究では、学生は実習中に手引をよく利用したものの、その使用方法に偏りがあることや、全体を理解した上での利用には至っていないことが明らかとなった。協働園においては、手引は利用されているものの、実習園全体としては、エピソード記録の指導に戸惑いもみられ、まだ手引利用が周知されたとは言い難い。以上のことから学生も実習園も、手引を十分利用している段階には至っていないと考えられる。ただし、今回、学生と実習指導者から改善策が多く提案されたことは有意義であった。今後はさらに、手引の改善を図るとともに、実習園への普及に努めていかなければならない。

4. 手引改訂の具体案

考察をもとに、手引改訂の具体案を提示する。

- 1) エピソード記録を書く回数については、現行では実習Ⅱで1回以上となっているが、

学生の力量を考慮すると、これ以上回数を増やすことは困難と思われる。エピソード記録を書く時期を実習Ⅱに限定すると、指導実習と重なり負担増となる場合もある。したがって、時期を限定せず、「実習中に1回以上エピソード記録を書く」と柔軟な設定とし、それを手引に明記する。

- 2) 「エピソード記録についての理解」の説明文をより分かりやすく理解できるよう、レイアウトも含めて書き換える。
- 3) 「子どもの姿の捉え方」で、題材例を多く示すことで、着眼点を見つけやすくする。
- 4) 「背景」について、本文との違いが理解できるように説明を加筆する。
- 5) 「参考事例」について、1～2例追加する。
- 6) 「指導の観点 ③考察に誤りや誤解はないか」の削除を検討する。
- 7) 基本的な文章力の育成（必要性）を明記する。

VI 資料

資料1 「実習におけるエピソード記録の手引」

実習におけるエピソード記録の手引

1. エピソード記録についての理解

1) エピソード記録とは

一回性の保育の現象を捉えることを目的とした実践記録のことである。具体的には、学生が印象に残った出来事（ハッとした、とても気になった、悩んだ、心揺ゆさぶられた、心に引っかかった場面等）を取り上げて描き出すものである。

2) エピソード記録の意義

学生が子どもの行動や背景を意識して子どもや保育者を観察することによって、その時の子どもの心情や保育者の援助方法の理解が深まる。また、学生の子ども理解や自身の観察や関わり方が目に見えるものとなることで、振り返りや意見の交換が容易になる。そのことによって、1日の反省・考察も充実することが期待される。

2. 学生への指導方法

1) 事前準備

(1) 実習前：実習の目的を明確にする（テーマをもつ）

例：生活習慣を見極めたい：こんな場面での言葉がけは？友達との関わりはどうか？

(2) 実習Ⅰ：①クラスの様子をじっくり観察する。

観察の観点を充実させるために、子どもの発達過程を押さえておく。

②担任の先生が大事にしていることを理解する。

子どもの姿やクラスの保育方針などを担任の先生にしっかり聞く。

2) 実施：実習Ⅱ

(1) 子どもの姿の捉え方

子どもの生活や遊びの中での会話やつぶやき等を意識して観察する。

観察するタイミング（トラブルに着目しがちになるので、ポジティブな出来事も意識するようにする）

- ・子どもが一人遊びをしている時
- ・友達と遊んでいる時
- ・保育者と関わっている時 など

(2) 文章構成

- ① タイトル：エピソードの内容を言い表したタイトルをつける
- ② 背景：エピソード場面がどのような状況の中で生まれたのかを書くために、その場面に至る経過や流れ、関わりのある人物の実像などを書く
- ③ エピソード：印象に残った出来事について、子どもと保育者の様子がよくわかるように書く
- ④ 考察：なぜこのエピソードを切り取って書いたのかわかるように、観察や関わりからわかったことを書く。年齢や個々に応じた心身の発達や家庭状況等を踏まえて考察する

3) 参考事例

学生A：一人で着替え（2歳児クラス）

背 景	エピソード	考 察
<p>今日の午睡の前に、みんなでパジャマに着替えている時であった。私が援助をしていたみつばちグループは、実習の当初自分で着替えることができなかつたり、甘えてくる子もいた。中にはA児など、私が何も言わなくてももう着替え終わって絵本を読んでいる。</p> <p>一方でB児は自分でやろうとしているけれど、前後を間違えたり、一番上のボタンをとめるのが苦手だった。</p>	<p>今日もいつものように、パジャマに着替える子ども達を見守りながら、傍で他の子の援助をしていたとき、B児を見ていると、パジャマの前後も合っていて、一番上のボタンを自分で留めようと必死に頑張っていた。</p> <p>いつもだったら「留められないから留めて」と言ってくるが、今日は「先生見ててね」と私に言ったので、ずっと応援していた。「先生できたよ!」と、留めることができたB児を「よく一人でできたね」と褒めると、少し照れた顔をして絵本を読みに行った。</p>	<p>小さな出来事と思うこともあるけれど、毎日の子どもの姿を一人ひとり見て感じているから分かることだと思った。自分でやりたいという気持ちは、いつも大切にしている。</p> <p>子ども自身の中でもできることが当たり前にできることも大切だけど、できなかったことが努力してできるようになった方が、喜びも大きいと思う。まずは保育士や大人から認められることが何よりも嬉しくて、少しずつ自分への自信に繋がるのではないかと思う。共感して一緒に喜んだり、頑張りを認めたりすることで、頑張れたりするんだと改めて思った。子どもから「見ててね」と言ってくるのは、今日はできそうと感じて先生に見守って欲しいのかなとも感じた。</p>

学生B：顔つけ（4歳児クラス）

背 景	エピソード	考 察
<p>いつもは、プール遊びの時、みんなが足をバタバタさせる時や、自由遊びの時、プールに背を向け水を怖がる姿が見られる。水を肩や頭からかけると「キャー」と叫んだり、「やめてー」としゃがんだりする時もある。今日も、お母さん座りをし、「お願いします」の挨拶をする時、少し深いところにいて固まっていた。</p>	<p>今日、プール遊びの時、E児が挨拶する時顔つけができないでいた。そこで「浅いところへ行ってみましょうか」と言って、水の浅いところへ行くと、急にE児は「E、顔つけできるんよ」と見せてくれた。私が「すごい！Eちゃん、顔つけ上手だね。次はお母さん座りして顔つけしてみよう」と言うと、E児は挨拶と一緒に顔つけをすることができた。</p> <p>E児は自信がついたのか、その後も進んで顔つけをしたり、ウォータースライダーを顔から滑ったりと楽しんでプール遊びをする姿が見られた。</p>	<p>少しでもできたことを認められ、褒めてもらうと、子ども達は自信に繋がり、次はもうちょっと難しいのをしてみようと、挑戦したり、頑張ったりすることができるのだと改めて思った。</p> <p>最初の一步を援助し、そこを子ども自身が「できた！」と満足感を味わったり、褒められることで「もっとやりたい！」「楽しい！」と思えるようにしていくことで、自信に繋がり「水は怖い」から「水は楽しい」に変わっていくことができるのだと思う。</p> <p>今日の自信が明日からも発揮できるように、援助や言葉かけをしていきたい。</p>

3. 指導の観点

- ① 状況把握は適切か
- ② 子どもに寄り添えているか
- ③ 考察に誤りや誤解はないか
- ④ わかりやすく文章化できているか

資料2 「実習におけるエピソード記録についての調査」

実習におけるエピソード記録についての調査

実習園：No. _____ 園名 _____ 担当年齢 _____

学籍番号 _____ 氏名 _____

1. 「エピソード記録の手引」をどのくらい使いましたか。

1～5のうち、あてはまる数字に○をつけて教えてください。

1：全く使わなかった、2：少し使った、3：まあまあ使った

4：けっこう使った、5：非常によく使った

1) 実習前 5段階で評価してください。 1 2 3 4 5

2) 実習中 5段階で評価してください。 1 2 3 4 5

→2) で1～2に○をつけた人におたずねします。

エピソード記録の手引を使わなかった理由として当てはまるものの数字に○をつけてください。(いくつ○をつけてもかまいません)

- 1) 時間がなかった
- 2) 使い方がわからなかった
- 3) 使いたい内容がなかった
- 4) よく分かっているので使う必要がなかった
- 5) その他()

→2) で3～5に○をつけた人におたずねします。

「エピソード記録の手引」の項目で、役に立ったところはどこですか。当てはまるものの数字に○をつけてください。(いくつ○をつけてもかまいません)

- 1) エピソード記録の説明
- 2) 学生への指導方法 ①事前準備
- 3) 学生への指導方法 ②実習Ⅱ：子どもの姿の捉え方
- 4) 学生への指導方法 ③文章構成
- 5) 参考事例
- 6) 指導の観点

4. 手引改善のための意見をお聞かせください。改善して欲しいところはどこですか。

(いくつ書いてもかまいません)

- 1) エピソード記録の説明
- 2) 学生への指導方法
- 3) 参考事例
- 4) 指導の観点

5. エピソード記録を書いて、良かったところ・困ったところを各1つずつあげて下さい。

- 1) 良かったところ
- 2) 困ったところ

謝 辞

本研究を進めるに当たり、実施にご協力いただきました実習園の先生方に、深く感謝申し上げます。

VII 参考・引用文献

- 1 岡山県保育士養成協議会保育実習委員会編「保育所実習の手引」平成25年改訂版。
- 2 澤津まり子、村田恵子(2013)「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習(保育所の試み)『就実教育実践研究』第6巻、83-97.
- 3 澤津まり子、鎌田雅史(2014)「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習(保育所の実践－実習園の意識調査を手がかりにして)『就実教育実践研究』第7巻、83-97.

- 4 鯨岡峻 (2005) 『エピソード記述入門』 東京大学出版会.
- 5 澤津まり子他 (2014) 「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習 (保育所) の実践 - 実習日誌の検討を手がかりとして」 『就実論叢』 第43巻、285-296.
- 6 澤津まり子他 (2015) 「実習施設と保育士養成校の協働による保育実習 (保育所) の実践Ⅲ - 実習日誌におけるエピソード記録を手がかりとして -」 『就実教育実践研究』 第8巻、105-114.
- 7 塚田みちる (2014) 「実習における<子ども - 実習生との関係>の検討 - 保育実習・教育実習での体験をエピソード記述で描く -」 『神戸女子大学短期大学論攷』 59巻、1-16.
- 8 増山由香里、勝浦真仁 (2014) 「エピソード記述は保育者養成にいかにか活かせるのか - 学生との対話を通して -」 『旭川大学短期大学部紀要』 第45号、81-92.
- 9 穴戸良子、柴田千賀子、狩野奈緒子 (2013) 「実習記録形式改訂による可視化 (1) - エピソード記録から子ども理解を深める -」 日本保育学会第66回大会発表要旨集、400-401.
- 10 石井美和、柴田千賀子 (2014) 「子ども理解を深めるための実習記録の活用 - エピソード記録の活用の実践 -」 『桜の聖母短期大学紀要』 第38号、65-77.
- 11 湯澤美紀 (2014) 「エピソード記述を通した学生の育ち - 幼児理解の深まりを目指して -」 『保育士養成研究』 第32号、61-70.